

2023-24 年度  
福山西ロータリークラブ

# 例会情報

第 1542 回 (9)

会 長 瀬 尾 義 裕      幹 事 黒 木 成 光

クラブ会長テーマ



「次世代に希望を繋ごう！～手を取り合って～」

日 時	2023 年 9 月 5 日 (火) 12:30 ~
場 所	福山ニューキャッスルホテル
例会行事	点 鐘 ・ ソング 「君が代・奉仕の理想」 ゲスト・ビジターの紹介 (出席報告参照) 会 長 報 告 幹 事 報 告 出 席 報 告 S A A 報 告 ス マ イ ル 報 告 プ ロ グ ラ ム 情 報 そ の 他 報 告
その他情報	メークアップ情報 (来週分) メークアップ情報 (再来週分) 今後の行事予定 クラブ活動報告



世界に希望を生み出そう

## 【 会 長 報 告 】

今月9月は「基本的教育と識字率向上月間」となります。当月間は、「地域社会で基本的教育を普及し、識字能力を高めるためのプログラムを支援し、地域社会の参加促進、成人識字率の向上、教育における男女格差を減らすための活動などを念頭に定められています。以前にもご報告しましたが、国際ロータリー理事会は当月間を含む特別行事を定めておりますが、「ロータリー章典第8条2項」には「奉仕を認識し重視するため、理事会は以下の特別月間・週間・日を設定した」として、ロータリー月間が集約されていますのでご参照下さい。

さて、世界には子どもたちが基本的な教育を受けられず、成人が十分に読み書きできない国や地域があります。日本人にとって読み書きは呼吸と同じくらい自然な行為に思えても、世界には教育の機会に恵まれない人びとが大勢います。こうした人びとは、仕事を得るために履歴書を書いたり、子どもの通信簿を読んだり、処方薬の説明書を読んだりすることができません。そうした地域で基本的教育を提供し、識字率を上げれば、そのほかの諸問題の解決（貧困の削減、健康状態の改善、地域社会と経済の発展、平和構築など）の糸口をつかむことができます。

勿論、世界的には教育・識字の分野で進展が見られています。国連ミレニアム開発目標の報告書によると、成人と青少年の識字率は上がっており、男女差も縮まっています。しかし、まだ多くの面で課題が残されています。

世界で7億8100万人の成人（世界の15%）が読み書きできず、うち2/3は女性です。初等教育を受けた後も読み書きのできない子どもが2億5000万人います。5800万人の子どもが学校に通っていません（なお、1990年は1億0200万人）。小学校へ入学した1億3700万人のうち3400万人（約25パーセント）に中退の可能性が高いといわれています。子どもたちが学校に通えない主な理由は、貧困、性差別、遠距離通学などです。

また、女性・母子の健康に対する影響も大きなポイントです。すべての女性が初等教育を修了すれば妊婦の死亡率は66%減少するとされます。読み書きのできる母親を持つ子どもは、読み書きのできない母親の子と比べて、5歳以上まで生き延びる確率が50%高いです。女性には地域間格差の問題もあります。中東、南・西アジア、サハラ以南アフリカといった地域ではまだ大きな男女間格差が見られます。これらの地域で女子生徒が少ない主な理由は、女性の社会的立場が弱い、経済的理由（交通費・授業料、収入を得るための仕事の手伝い等）、男性教員が圧倒的に多く教員が性差別について研修を受けていない、長距離通学のため安全上の問題がある（性暴力の標的となりやすい）、学校に十分な衛生施設（個別トイレなど）がないなどが挙げられます。

今月9月は「基本的教育と識字率向上月間」ですので、是非、これらの問題を改めて認識しましょう。日々の活動に直ちに活かすことは難しいかも知れませんが、このような視点を常に持って、クラブ活動や個々の奉仕活動につなげて参りましょう。

# 【プログラム情報】

## 《 ゲスト卓話 》



早稲田大学 社会科学部 1年  
塩川 愛 様

### 「全ての人と共に生きるために ～被爆者とハンセン病回復者から学んだこと～」

こんにちは！塩川愛です。本日はこのような機会をいただき、本当にありがとうございます。本日は「すべての人と共に生きるために～被爆者とハンセン病回復者から学んだこと～」というテーマでお話しさせていただきます。

まず、私の簡単な自己紹介をさせていただきます。今年3月に福山市の盈進高校を卒業しまして、現在、早稲田大学社会科学部1年生です。中高時代は、福山市にある盈進中学校のヒューマンライツ部に6年間在籍しました。クラブの活動テーマは「手と手から～中高生として、地域や国際社会の平和と人権の環を広げるために貢献する～」。このテーマに基づき、主に四つの活動をしていました。一つ目は、核廃絶署名活動。二つ目はハンセン病問題から学ぶ。三つ目は、被災地支援交流活動。四つ目は地域貢献活動です。現在も、東京の仲間とこれらの問題に関わり続けています。

口頭だけではヒューマンライツ部の活動が想像しにくいと思いますので、活動紹介の動画をご覧ください。

動画にもあるように、私はこれまで多くの出会いと尊い学びをいただきました。本日は、核廃絶、ハンセン病問題の二つに焦点を当てて、お話しします。不慣れな部分も多いと思いますが、温かい目で、心で聞いていただければ幸いです。最後までよろしく願いいたします。

これから、核廃絶のプレゼンテーションを行います。時折、ショッキングな画像があります。ご注意ください。

### 「記憶せよ 抗議せよ そして生き延びよ」

この絵。広島空が「ピカ」と光ったその瞬間、母は本能で、わが子を守ろうと覆いかぶさった。母が子を抱いて、真っ黒こげになった。

人間の仕業である。決して繰り返してはならない。

1945年午前8時15分。広島は地獄と化した。爆心地周辺の地表温度は約4000度。人々は全身が燃やされ、その年に約14万人が命を奪われた。

の日から、今年で78年。私は現在もなお、12000発以上もある核兵器に「No!」を突きつけ、ナガサキが人類最後の被爆地となるよう、核廃絶を訴える。

現在、世界では「核兵器があるから、平和が保たれる」という核抑止論が蔓延っている。だが、核に

よる脅し合いの平和は本当の平和と言えるのだろうか。私は被爆者に出会い、核兵器によって保たれる平和は脆く、偽りの平和であると確信した。私たちは今こそ、被爆者の魂の叫びに耳を傾けなければならない。

切明千枝子。現在、93歳。私がクラブ活動で出会った被爆者の一人。時に目に涙を浮かばせながら語られる切明さんの証言は私の平和活動の原点となった。

女学生だった15歳の時に被曝。あの日、8月6日。朝からカンカン照り。切明さんは、学徒動員の作業があったが、関節炎の治療で外科に行くため、休暇をもらっていた。その途中、比治山橋の手前の小さな小屋の軒下に入って、大粒の汗を拭おうとした、その瞬間。

凄まじい閃光。まるで、太陽が目の前に落ちたようだった。すごい爆風。切明は、橋のたもとで地面に叩き付けられ、気を失った。

意識が戻った切明さんの目は、凄まじい光景をとらえた。大きな炎が上がり、真っ黒い煙が渦巻いていた。

すると・・・橋の向こうからたくさんの人が悲鳴をあげながらこっちへ向かってきた。

服が、ぼーぼー、ぼーぼーと燃えていた。

熱さに耐えかね、橋の欄干を乗り越えて、川に飛び込む人もたくさんいた。

切明さんの目の前を、燃えながら、泣きながら、たくさんの人が逃げていった。

下級生が帰ってきた。でも、誰が誰だかわからない。顔は1.5倍ぐらいに腫れ上がり、髪の毛は逆立ち、散り散りに焼けていた。

切明さんはこう証言する。「制服もみんな焼けて、裸同然だったのよ」「みんなね、手をこうして、前にあげてね、帰って来たんですよ」「手の指の先からね、昆布かワカメを泥水に浸したような真っ黒い物がね、ぶら下がってるの」

「全身火傷。皮膚がペロンと剥けて、足にも、ズルズルズルズル、それを引きずりながら帰って来たの」「1人、また1人。『お母さん、痛いよ。熱いよ』ってうめきながら、泣きながら死んでいったのよ」「それはもう、地獄でございました。」

灼熱の夏。遺体をそのまま、放っておくわけにもいかなかった。切明さんたちは、校庭に、浅い穴を掘り、吹き飛んだ材木を拾い集め、下級生の遺体をその上に乗せて焼いた。

切明さんの身体は金縛りになり、ガクガク震え、目を背けることができなかった。切明さんはとうとう、震えるままに一部始終を見た。

切明さんは目に涙を浮かばせながら、私にこう語った。

「私はこの手で仲間を焼いたの。そのときの、下級生の表情、声、息絶える姿、焼かれる光景・・・今でも全部、思い出して、心が痛むの」

「学校では、先生にこう言われたの。『お国のために命を捧げろ』って。

「天皇のために、喜んで死ぬ」ってことなの。間違った教育は怖いよ」

「いま、私は怖い。戦前の状況によく似てきたから」「私は、過去を忘れたいと思ってきたの。でも、いま、黙っていたら、再び戦争が起きる気がするの」「だから、死んだ仲間のためにも、語るのよ」

「平和は黙っていても、やってこない。みんなで必死になって掴み取り、」

私は京都外国語大学の被爆者証言の世界化ネットワーク、NET-GTASと協働して、切明さんの

証言を英訳し、インターネットで発信する活動を行った。肝に命じたのは、私たちの英訳で、切明さんの壮絶かつ尊い人生の価値を下げないこと。コロナ禍は、オンラインで何度も話し合いを重ねた。作業は困難を極めたが、改めて切明さんの思いを深く受け取ることができた。

坪井直。核廃絶を願う人なら、知らない人はいない。  
オバマ大統領と最初に握手した被爆者、それが坪井直。  
20歳で被曝。2021年10月24日、亡くなった。96歳だった。  
坪井さんは爆心地から1.2kmで被曝。20分ほど背中が燃えた状態で逃げ惑った。手足、背中からお尻にかけて、火傷のあと（ケロイド）があった。

「Never give up!」坪井さんはよくこの言葉を使った。

それは核廃絶への、鉄より硬い広島信念。坪井さんから私たちへの魂の叫び。「命を大事にせよ。命ある限り生き抜け。」

「命こそ宝」沖縄戦を生き抜いた中山きくさんと同じ信念。

坪井さんは語る。「命の奪い合いをする戦争は絶対反対。まして、一瞬にして、多くの命を奪う核兵器は非人道の極み。絶対悪。核兵器はこの世に一発でもあってはならない。」  
「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない。」これは被爆者の復讐や敵対を超えた、素朴で崇高な平和を希求する思想。そして、この思いこそが被爆者の反核運動の原点である。

そんな被爆者の思い、原爆の歴史が風化されつつある。2015年に、NHKは日本全国の20歳以上の男女、約1800人を対象に、原爆意識調査を行った。「いつ、広島に原爆が落とされたか知っているか」という問題に対して、正しい年月日を答えられたのは、わずか29.5%であった。

今、私たちはボタン一つ押せば、いつでも、どこからでも、核兵器を使うことができる世界に生きている。もう二度と同じ過ちを繰り返さないために、私たちにできること。それは「あの日」を経験した被爆者の声に耳を傾けること。そして、受け取った思いを世界の人々、若い世代へとつないでいくことであろう。

世界の核廃絶をリードした、被爆者、森瀧市郎さんの信念。巨大な核に対するアンチテーゼ。  
Small is beautiful.力の文明から愛の文明に。We humankind must live. 人類は生きなければならない。  
No more Hiroshima, Nagasaki, Fukushima, Hibakusha, Okinawa, Ukraine, No more War.

続いて、これからハンセン病問題についてお話しします。みなさんはハンセン病を知っていますか？  
また、実際にハンセン病療養所に行かれたことがある方もいらっしゃいますでしょうか。

私は中高時代に、岡山県にある国立ハンセン病療養所、長島愛生園で、ハンセン病回復者と交流を重ねてきました。

まず、ハンセン病とはどんな病気なのでしょうか。ハンセン病はらい菌によって、末梢神経が侵される病気で、痛い、熱い、冷たいなどの感覚がわからなくなる病気です。また、手足や顔など、目に見える場所に症状が出ることから、人々から差別されてきた歴史があります。ですが、ハンセン病は非常に

うつりにくい病気で、現在、日本でハンセン病になる人はいません。

彼らを苦しめたのは、終生絶対隔離法「らい予防法」。ハンセン病患者の名前、故郷、子どもを作る権利など、人間としての尊厳を根こそぎ奪った法律です。

国は「ハンセン病は恐ろしい伝染病だ」と宣伝し、患者を療養所に強制収用しました。ハンセン病の差別は誤った情報を流した「国」とそれを鵜呑みにした「市民」の手によってつくられました。

現在、全国の入所者数は810人、平均年齢は87.9歳。回復者の中には、もちろん社会復帰された方もいらっしゃいますが、療養所内で一生を過ごす人が多いです。それは、地域での差別を恐れたり、ハンセン病の隔離政策によって家族との縁が切れてしまったからです。

今日はおばあちゃんなのに、「私は22歳です」って言う上野正子さんについてお話しします。正子さんは、鹿児島県にある国立ハンセン病療養所、星塚敬愛園に暮らしています。

上野正子さんは映画「あん」の主人公の元になった女性です。私は中学3年生の時、正子さんのお部屋にお邪魔させておたきました。その時に食べた特製のサータアンダギー（正子さんは天ぷらと呼ばれます）は本当に美味しかったです。とても優しくて、可愛らしいおばあちゃんです。

正子さんは2001年5月11日、「らい予防法」が憲法違反かどうかを問う、ハンセン病国家賠償請求訴訟に立ち上がりました。その判決の日の朝、正子さんは星塚敬愛園の納骨堂に眠る仲間にごう誓いました。「みなさんの無念を晴らします。負けたら、死にます」

正子さんたちは裁判に勝ちました。その時、正子さんは何を感じたのでしょうか。正子さんは裁判中も偽名を強制されていました。その名は「須山八重子」

療養所に入所するときは大抵の人が偽名＝嘘の名前を強制されました。それは、自分の故郷を知られないためであり、特に家族に迷惑を書けないためでした。家族の中から、ハンセン病患者が出たら、家族も同じように差別されてしまい、その地域に住めなくなってしまふからです。

正子さんは13歳の時、星塚敬愛園に入所しました。療養所まで正子さんを送り届けた正子さんのお父さんは、本当は、正子さんを一人ぼっちで療養所に置いていきたくなかったんです。でも、らい予防法の絶対隔離があったから、泣く泣く置いていったんです。

正子さんは本名に戻りたくて、本当の自分を取り戻したくて、そして、人間らしく生きたくて、裁判に訴え、国を相手に闘ったんです。

正子さんは裁判に勝った感想を求められたテレビマイクの前で、こう語りました。

「私の本名は上野正子です。父が正しく正直に生きなさい」という思いを込めて、正子と付けてくれました。

でも、らい予防法は正しく生きることを許さず、名前も奪いました。だから、今日が私の第二の誕生日です。」

今年は裁判に勝ってから22年目。だから、正子さんは自分の話をするとき、必ずこう言います。

「上野正子です。歳は22歳です。なぜ、22歳なのか。これからその話をします。」

これから、ヒューマンライツ部の先輩で、現在新聞記者として働く後藤泉稀先輩が当時、高校1年生の時に書いた作文を朗読します。

太郎。ぱっちりお目々に桃色ほっぺ。赤ん坊の名は太郎。

私が彼に出会ったのは、熊本県の菊池恵楓園に暮らすEさんの部屋だった。

絶対隔離政策は、結婚の条件として、男性には断種を、女性には墮胎や人工妊娠中絶を強制した。Eさんもその犠牲者だ。

ある日、Eさんは、玩具店で見つけた愛くるしいセルロイドの人形に心を奪われた。それが太郎。

Eさんは、服をつくり、わが子として愛した。

国は、「らい予防法」と「優生保護法」を盾に、ハンセン病者の子孫を残すことを禁じた。「撲滅政策」だ。

妊娠7ヶ月でした。取り出された赤ん坊は真っ黒な髪の毛の女の子でした。手足をバタバタさせていましたが、看護婦が別室に連れて行きました。後に私は、ホルマリン標本にさせられていたわが子を見ました。

鹿児島県の星塚敬愛園に暮らす玉城しげさんの証言だ。あまりに惨い。人間のすることではない。殺人だ！ と私は思う。

このような事例は、全国の療養所で行われており、入所者らの訴えに国は謝罪し、今では各園に供養碑が建つ。狂気がそれをさせたのか。いや、異常が通常だった。普通の看護婦が普通にやったのだ。であるなら、看護婦は、私だったかもしれない。

「らい予防法」違憲国賠訴訟弁護団長の徳田靖之さんはこう指摘する。

自分は救う側、患者は“かわいそう”で救われる側という固定観念にこそ、差別性が潜む。

“救う”意識が強いほど、その人のためによかれと思ってやっている自分が“正しい”と思いこんでいる。特に、絶対隔離政策という大きな枠内では、立場の逆転はなく、重大な過ちが見過ごされていた。

あなたに起きることは私にも起きる。

どんな人にも対等に、そして平等に。単純だが、最も大切なこと。

私にできているか。

太郎が問う。

私にとってのハンセン病問題。

無関心を改め、社会の一員としての自覚を持ち、いじめや差別を見抜くこと。

過酷な偏見、差別を生き抜いてきた人々から「生きる意味」を学ぶこと。

回復者に学び、彼らが「生きていてよかった」と思える活動を続けること。

忘れないこと。「生き抜いた証」を記録し、伝え続けること。

現在も、コロナウイルスやLGBTQ+など、さまざまな差別が繰り返されています。長島愛生園に暮らした、故・金泰九さんの口癖は「正しく知って、正しく行動する」でした。全ての人と共に生きるために、私たちに必要なのは、誤った情報を鵜呑みにするのではなく、正しく知り、正しく行動することです。また、現在、ハンセン病回復者の高齢化が進み、語り部活動ができる入所者は年々、減少しています。

是非、みなさんも今日聞いた話を誰かに伝えたり、ご自身で療養所に足を運んでみてください。



## 【その他報告】

### 《「ロータリーの友誌」紹介》

ロータリーの友誌 9月号 記事紹介  
大植 栄

関東大震災から100年 「ねがう、おくる、振り返る」 横目次16

江戸幕府から明治政府に受け継がれた資金を養育院に充てられたときに、経済人の渋沢栄一も尽力した。

しかし、大正12年9月1日の大震災を機に巣鴨へ移されて、江戸時代からの願いで「助けられるべき人たちのために」の理念が今も脈々を受け継がれている。

関東大震災時に国際ロータリーは2万5千ドルの見舞金を送り、世界各国503クラブから、救援金として8万9千円が送られた。その当時のロータリーの活躍の歴史を感じられた。

「読み書きが苦手な子どものために」 縦目次4～8

発達障害児たちの問題は3つに大別される。①社会性（対人関係）の問題、②コミュニケーションの問題、③こだわるの行動（創造力）の問題がある。そのために幼児期から、その子の特性を理解し、対応することが大事である。特性を生かすために否定的な言葉を使わずに、肯定的な言葉で伝える事が効果的である。

発達障害の人に共通しているのが、飽くなき好奇心。つまり、好奇心が凄いということは、人として素晴らしい特性である。いかにその人の特性を認めてサポートをするかが必要がある。

この人訪ねて 故金正司さん 縦目次9～12

「バイクに魅せられ外注駆除で頭角を現す」

ワイルドな少年時代に柳ヶ瀬をバイクで走って青春を過ごした故金正司さんは、害虫駆除のビジネスで成功する。その彼が、岐阜中ロータリークラブに入会し、会長も務め、マラリア感染予防策として、2010年にアフリカ南東部のマラウイに蚊帳200帳を送る活動もした。実際に現地を訪ねると、蚊帳で寝ているのは親ばかりで、どうして子供に蚊帳を使わさないかと聞くと「子供は死んでもすぐ生まれる。親が死ねば家族全員死んでしまうから」と言われた。この記事を読んで、食料や物質支援だけではなく教育支援の必要性も感じた。



《各種表彰等》

【誕生日】



《9月7日生まれ 目黒 由成 さん》

【ロータリー財団寄付】



《マルチプル・ポール・ハリス・フェロー2回目 藤井 英勝 さん》